

富倉先生を送る

渡 辺 三 男

昭和二十七年に、この大学へ来任されたのだから、お年もなお盛壯四十代の末年で、在任二十五年に及ばれたわけである。歳末にいただいた、初冬のご旅行からお帰りの由のご挨拶状に、△春から人の世の折り目で、暇多き身となります▽と追記されていたが、近く定年を迎えられるので、本誌も特集号を編んでお送りすることとなった。

今年も、数人の先輩教授をお送りするが、その多くが在任十年に満たない方々である中であって、在任二十五年、きびしかった戦後のこの大学の歩みと労苦を共にされた長老中の長老であられたから、長く同僚として席をつらねたわれわれにとって、惜別の情に耐えないものがある。

その二十五年は、在学生二千人の大学から二万人の大学へと大きく発展した、まさに激動の四半世紀で、その前半期の在職者の労苦には、容易ならぬものがあった。いまそのことを想起するにつけて、惜別の情特に切なるものがある。

塩田良平・森本治吉両先生と早くからお仲がよく、われわれの目には、国文学界のトリオとも三羽鳥とも映った。塩田先生が、二松学舎大学の新制初代の学長となられたとき、両翼から支えられたのも、お二人だった

と聞いている。

塩田先生は、この大学に戦前から卒去の直前まで出講されており、なじみ深い先生であったが、その紹介で森本先生が来任され、次いで大学院設置の際富倉先生がおいでになり、森本先生転出の後を受けて、国文学科の主任、また大学院の国文学専攻主任として、長い間運営指導に、文字どおり骨身を削る苦勞をされた。国文学科の前身である旧制東洋学科の創成期の功勞者を福井久蔵博士とするなら、富倉先生こそ、まさに中興の功勞者として、そのお名前は、国文学科とともに、永く銘記されるであろう。

本学在任中、学位も得られ、また私が司会をした還暦の賀宴、次いで古稀の賀寿も迎えられ、その間お二人の愛嬢も良縁を得られてお孫さんもでき、いまやいいおじいちゃまになられて、この度その年には見えない喜寿を迎えられた。半生を過ごされた思い出深いこの学園を、後進に道を譲っていま静かに去って行かれようとするご心境を、労苦を共にした同僚の一人として、私は十分にお察しすることができる。

塩田先生すでに亡く、森本先生もご健康すぐれぬと聞いている中であって、先生お一人ますますご清健であられることは、おめでたい限りである。いっそうお体にお気をおつけになり、旧に倍して、私どもにご指導を賜わるようお願いして、送別の蕪辞とする。

(昭和五十一年十二月三十日記)